

# 上海における寺院や墓地の復興と死者供養

曹 起虎（歴史民俗資料科学研究科 博士後期課程）



2011年2月17日から3月17日まで派遣研究員として上海の華東師範大学中国非物質文化遺産保護研究センターを訪問し、現地調査をする幸運に恵まれた。同センターでは、陣勤建氏をはじめとする姚美玲ら教授陣のご指導のもと、研究を行うことができた。当初予定したテーマは「現代中国の都市における寺院復興と共同墓苑における『死者供養』変容に関する研究」であったが、今回は「寺院復興」という視点を越え、幅広く「宗教復興」の角度からも共同墓苑や死者儀礼の変容について探ることにした。すなわち、仏教以外に儒教・道教といった他宗教にみられる死者供養についての研究も試みた。さらに、上海市内のカトリック・プロテスタント・イスラム教などにおける宗教行事にも参加して、それぞれの宗教行事を頻繁に見学することができた。

文化大革命（1966－1976）の後、1990年代に入ると、上海では経済的な発展にともなって静安寺・真如寺・玉仏禅寺・龍安寺など著名な寺院以外にも数え切れないほどの寺院が復興された。さらに、祖先崇拝や死者供養が数多くの宗教施設で行われるようになった。

訪問期間中、静安寺においては、仏教の祖先崇拝の儀式である「超度（『死者供養』の意味）」という行事（写真1）の様子を見ることができた。これに参加する信者は数えられないほどであり、今日の中国人にとって、「超度」がなおも重要な位置を占めていることが感じられた。この静安寺では、現地でチューターを務めてくださった黄景春氏の交渉により、同寺の法師・釈妙霊という方から説法を聞くことができた。このなかで、人生の儚さを実感した。

この数日後には、真如寺・留雲禅寺・玉仏禅寺で行われる寺院復興の現場を見学することもできた。ここでは、「超度」を通して、報本反始の大切さを感じながらお祈りをする仏教の信者たちの動きを目のあたりにした。また、これらの寺院には位牌がかなり多くあった。一般的には赤色の位牌は生者であり、黄色の位牌は死者を表すということであった。さらに沈香閣では、活潑に息づいている仏教の雰囲気が満喫できた。そこを訪ねた時、ちょうど多くの信者たちの参加のうち、仏教經典の読経が

行われた。ここでは月に何度も仏教經典の読経が行われ、筆者が訪ねた寺院の中では最も活潑な仏教の雰囲気に溢れていた。ここでは、比丘尼になりたいという20代の女性が5、6人いた。関係者によると、仏教經典の読経は祈りの性格とは別に、彼女たちの入信を祝うという性格ももっているということであった。

青浦の福寿墓苑では、一般の人々の墓と偉人たちの墓、キリスト教関係者の墓地がよく区分されていたことにある種の違和感と驚きを感じずにはいられなかった。

一方、死者供養という宗教的な救済システムの現場ではないが、儒教・キリスト教の現場も見学することができた。イスラム教の清真寺・道教寺院の海上白雲観と大境閣・董家渡天主教堂などがそれである。とりわけ、董家渡天主教堂の場合は参加した日が日曜日であったため、夜のミサも見学できた。ここで驚いたのは、建物の歴史が古く夜のミサであるにもかかわらず、大勢の人が参加していたことである。ミサの最中は聖歌団員の活潑な動きを見ることができ、建物の近所に故人となった信者たちの墓があるということを教えられた。

上海では、以上のような有意義な研究を行うことができた。最後に、上海でお世話になった3人の教授と3人のチューターの方々に対する感謝の気持ちを表明したい。



写真1 静安寺の「超度」行事